

異世界へ誤召喚

されちゃいました

3

女神の加護で
ほのほの
スローライフ
送ります

著 モーリー



CHARACTER

ユグドラシル

女神に生み出された精霊。
異世界での案内役で、
植物からなんでも
作り出す能力を
持っている。

ドラコ

女神に命令され、
蓮たちのもとにやってきた
ツンデレドラゴン。
人型に変身することも
できる。

シュバルツ

王都レグナムの
最上位魔法士の一角。
蓮たち三兄妹に
何か用がある
ようで……

リル

世界に一体しかない
伝説のフェンリル。
威厳ある見た目だが、
食いしん坊で桜の料理
には目がない。

レン 蓮

本編の主人公。御剣家の
長男で、異世界で
心機一転、三兄妹での
スローライフを
目指す。

サクラ 桜

御剣家の高校生の長女。
兄を慕っている。
女神から授かった魔法の
能力は蓮が目を見張る
ほどの実力。

ヒマワリ 向日葵

御剣家の幼稚園児の次女。
好奇心旺盛で天真爛漫。
蓮にも桜にも
溺愛されている。

フィーネ

小人族とエルフ族の
ハーフでポーション
調合師の一人。
フローネとは双子の
姉妹。

ウイステリア

妖精族でポーション
調合師の一人。
いつも陽気で、口も
フレンドリー。

フローネ

小人族とエルフ族の
ハーフでポーション
調合師の一人。
フィーネとは双子の
姉妹。

第一章

僕——御劍蓮は、飛行機事故で両親を亡くし、二人の妹を養うために必死で働く日々。
高校二年生の妹の桜は、頭脳明晰で気配りができて料理上手。

もう一人の妹である向日葵、通称ひまちゃんは明るく元気で天真爛漫で、いつも僕を癒してくれる。

三人で支え合い、助け合いながら生活をしていたある日。

時空神クロノスさんの誤召喚によって剣と魔法の異世界テルセニアにやってきた。

誤召喚のお詫びとして受け取ったのは、チート級の加護と世界最強の守護者たち。

僕は接近戦向きな加護を、桜は魔法戦向きな加護を授かり、鍛える前からそれぞれ人類最強クラス。

ひまちゃんは、創造神様から超反撃性能を備えた自動障壁という鉄壁の加護を授かったことで無敵。

さらに、植物の精霊ユグドラシルさんと神狼のリル、ドラゴンのドラコの三名が守護者として同

居してくれることに。

守護者の三人がそれぞれ知識も能力も戦闘力も申し分ないおかげで、僕たちは気楽な異世界スロ―ライフを送れていた。

狩りと農業で自給自足の生活を送る中、冒険者ギルドのギルドマスターから持ち掛けられたのは、冒険者たちの生存率や生活水準を高めたいという相談。

僕たちはその願いを叶えつつ、収入を得るために、ユグドラシルさんと桜が生み出した果物ポーションの販売を開始した。

そのポーションは美味しい上に回復効果が高く、予想以上の売れ行きを見た。

そんな中、従来のポーションが全く売れなくなったことで職を失う三名の調合師^{ちようしやうし}さんを雇用して、ユグドラシルさんが管理するこの森で一緒に働くこととなった。

僕がユニークスキルを持つ魔物――別称特殊^{テリブスモンスター}個体を倒したことや、果物ポーションの噂が広まれば、僕たちはしばらく王都に行かなければならないらしい。

そうなる前に、調合師さんたちに新しい環境に馴染^{なじ}んでもらい、仕事を覚えてもらうことが今の課題だけど、大切な仲間として慌てずに関係を築きたい。

そう思いながら、僕は朝の支度を済ませて大樹^{たいじゆ}の家の外に出た。

家の近くにある湖の畔^{ほとり}にはユグドラシルさんとリルと竜型のドラコがいる。

その手前には今日から一緒に働く仲間、小人族^{こびやんせう}とエルフ族のハーフにして双子の姉妹であるフィーネさんとフローネさん。

そして妖精族^{ようせいぞく}のウイステリアさんも。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

僕が尋ねると姉のフィーネさんと妹のフローネさんが「こんなにぐっすり眠れたのは初めてです」と口を揃え、ウイステリアさんは「最っ高だったよ！」と元氣いっぱいに答えてくれた。

「元のベッドも悪いわけじゃなかったけど、ユグドラシルさん特製のベッドはレベルが違いますよね」

「あのベッドを体験しちゃったら、もう元の生活には戻れないよお」

桜の言葉にウイステリアさんがそう答えると、フィーネさんが続く。

「ウイスの言う通りです。それにあんなに広い部屋を使わせていただけるなんて……本当にありがとうございました」

フィーネさんは幸せを噛みしめるように感謝し、お辞儀をした。

その隣で、フローネさんもお辞儀をする。

「お気に召^めしたようで何よりです。といっても全部ユグドラシルさんに用意してもらったんですけどね」

「ゆぐちゃんはずいんだよね」

僕の言葉にひまちゃんが自慢げに続くと、ユグドラシルさんは「ふふふ。お安い御用です」と笑顔で答えてくれた。

「お風呂も問題なかったですか？」

「はい。とっても気持ちよかったです」

桜が尋ねるとフィーネさんとフローネさんが口を揃えて答えた。

そしてウイステリアさんは羽をパタつかせながら言う。

「あたしは羽が濡れちゃうとだめだから湯浴みはしてないんだけど、浄化のおかげでスツキリさっぱりだよ！」

さらにウイステリアさんは「ほんの少し魔素を流すだけで、空間全体に浄化が発動されるなんてすごすぎるよね！」と続ける。

あれ？ みんな光属性の魔法の適性あったよな？

なんでそんなに喜んでるんだろう？

「あの……浄化って難しい魔法なんですか？」

「難しくはないんだけど、今回の普通と比べて効果が大きすぎるのに、消費魔素はすつごく少ないんだよ」

僕が疑問に思い尋ねると、ウイステリアさんはそう教えてくれた。

「通常、浄化は手や口など部分的に使用するもので、空間ごと綺麗にするなど聞いたこともありま

せん」

フィーネさんがそう言うのと、フローネさんは「流石は精霊様がお作りになられたものです」と晴れがましそうに言う。

本当に信仰心が篤いんだな。

「そういうえば、魔素を節約したいから、水浴びすることが多いってローさんが言ってたよ」

桜がそう言うのと、フィーネさんが「そうですね。水浴びか、湯を含んだ布で身体を拭くのが一般的です」と教えてくれた。

聞けば、湯浴みをするのは貴族や王族くらいらしい。

これ以上異世界からやってきた人として目立たないためにも、この世界の常識をもっと学ばないといけないな。

僕がそう思っていると、桜が小声で耳打ちしてくる。

「私も同じくらいの浄化を簡単に使えるってこと、言わないでね」

「了解だよ。今言っちゃうと、桜が規格外扱いされちゃうもんね」

僕が小声でそう答えた次の瞬間。

「ねえねもね！　きれいきれいのまほう、じょうずなんだよ！」

ひまちゃんの言葉を聞いて、桜は慌ててひまちゃんを見た。

「お、お姉ちゃんでもお部屋ごとは無理じゃないかなあ！」

「そ、そうだねえ。難しいかもねえ」

桜が必死で誤魔化してるので、僕も最大限のフオローをした。しかし、僕らの思惑は無邪気な言葉で、木っ端みじんに打ち碎かれる。

「え？ おとまりしたときに、ぴかーってぜんぶきれいにできてたよ？」

ああ……思いつ切り言っちゃったよ。

嘘に付き合わせようとしたお兄ちゃんたちがいけなかったね。

僕がそんなことを考えていると、ウイステリアさんが言う。

「お泊まりした時って多分グリーデンの宿屋のことだよな？」

「ウイ、ウイス！」

フィーネさんとフローネさんが声を揃えてウイステリアさんを止めようとし、桜は「知られてしまった……」と膝から崩れ落ちた。

よほど規格外扱いされなくなかったのだろう。

桜の様子を見て、触れてはいけない雰囲気を感じたのか、フィーネさんとフローネさんが気まずそうに言う。

「あ、えっと……」

「わ、私は何も聞いていません……」

なんて優しい姉妹なんだ。

よし。今のうちに話を変えよう。

僕はそう思い口を開く。

「そろそろ……」

「え!? ちゃんと聞いておきなよ！ サクラちゃんも浄化クリンができるんだって！ すごいよね！ 精

霊様並みだよ！」

『朝食を食べよう』と言って、会話の流れを変えようとしたのだが、ウイステリアさんの言葉が桜へと突き刺さる。

さらにウイステリアさんは「兄妹揃ってすごいんだねえ！」と続けた。

それを聞いて、桜は「わ、私は普通の人族ヒトですよ!？」と、規格外第一号の僕と同じくくりになれたことを拒んだ。

桜……お兄ちゃんも人族だよ……

確かに超人的なステータスだし、普通の人じゃ倒せない別称特殊個体エイリアスセンスターを倒したし、風魔法で作りだした風の板を飛び移って空中移動できちゃうけど、れっきとした人族なんだよ……

「ま、まあ、ここでの生活が今のところ快適ならよかったです」

僕が悲しみを抑えながらそう言うと、ウイステリアさんは「快適だし好待遇だし、もう感謝しかないよ！ 生涯雇用でお願いします！」と元気いっぱい言う。

それを見てひまちゃんが「あい！ まかされた！」と敬礼けいれいしながら答えた。

うんうん。二人とも悪気は微塵^{みじん}もないんだね。それならいいや。

「ど、とりあえず食堂に移動しましょう！ リルもドラコも行くよー！」

桜は雰囲気を変えるように明るくそう言いながら、みんなを食堂へと先導^{せんどう}した。

「すぐに準備ができるので、少しだけ待っててくださいねえ」

食堂に着くと、桜はそう言って厨房に入った。

そして桜は街で買ってきたポウルやフライパンなどの調理器具や食材をキッチンに並べ始める。

「あれ？ それってひよっとして」

「そう。ツキノさんに教えてもらったビッグカウのお肉とガーデンバードの卵だよ」

並べられた食材を見て僕が尋ねようとすると、桜が笑顔で教えてくれた。

「あ！ たまご！ ひいちゃんも、こん・こん・ば・かしたい！」

すると、ガーデンバードの卵を見つけたひまちゃんが目を輝かせて言う。

『こんこんぽか』とは、ひまちゃんが名付けた卵を割る作業のことだ。

「みんな待ってるから今は一個だけにしようね」

「あい！ てんちよう！」

桜の指示に、ひまちゃんは敬礼をして従う。

桜を店長と呼ぶということは、きっとひまちゃんの中で、飲食店のごっこ遊びが始まっているの

だろう。

「こん！ こん！ ぽか！」

「お、新人さん！ 上手ですねえ。すぐに店長になれちゃいますねえ」

ひまちゃんが掛け声とともに卵をボールに割っていく。

上手く割れるたびに、桜が褒めると、ひまちゃんはどんどん上機嫌になっていった。

「ヒマちゃん様。とてもお上手です。きっと美味しいものが出来上がりますね」

ユグドラシルさん。まだ卵割ってるだけだよ。

僕が心の中でツツコミを入れていると、信仰心の篤いフィーネさんたちは「おっしやる通りです

ね」と言いながら頷いた。

信仰してても、首を横に振ることがあってもいいんですよ？

「新人さん！ 次は卵を混ぜてくれますか？ できるかなあ？」

桜がそう言うときひまちゃんは「てんちよう！ まかせてください！」と言い、ポウルに割った卵を混ぜ始めた。

「ぐるぐる♪ ぐるぐる♪ ぐるぐる♪ まぜてえ♪」

ゆっくり混ぜているため、あまり綺麗に混ざってない……

まあ、可愛いからいいか。

「はーい！ ありがとう！ ここからは危ないから、お姉ちゃん店長に任せてえ」

「あ……うー」

桜がそう言つて箸とボウルを受け取ると、ひまちゃんはすぐ不満そうな表情で桜を見つめた。言葉にしなくても、ひまちゃんの顔には『もっとおてつだいしたい』と書いてある。

このままではひまちゃんの機嫌が悪くなるので桜が言う。

「あ、いけない！ 新人さん！ 机を拭き忘れてる！ このままじゃ朝ごはんを食べられないよ！」それを聞いたひまちゃんは「はっ！ ひいちゃんにまかせて！」と言い、ユグドラシルさんに駆け寄った。

「ゆぐちゃん！ たおる！ たおるちようだい！ ふきふきしないと！」

「ふふふ。かしこまりました」

ひまちゃんに言われ、ユグドラシルさんはすぐさま小さなふわふわのタオルを生み出した。

そしてタオルを受け取ったひまちゃんは、ユグドラシルさんにお礼を言い、桜に「てんちよう！ まかせてください！」とタオルを見せに行った。

「おー！ 新人さん準備が早いねえ！ じゃあ一番向こうの机を拭いてきてくれるかなあ？」

桜はキッチンの水場に設置された取っ手に魔素を流し込んで水を出し、タオルを渡しながらテラスを指さして言った。

「あい！ ゆぐちゃんいくよー！」

桜の指示を聞いたひまちゃんは、敬礼をして答えると、ユグドラシルさんの手を引いてテラス席

へ向かった。

きつと綺麗に拭けるかどうか自信がないからユグドラシルさんに助けてもらうつもりなんだな。

「はあひまちゃん様の小さな手が愛おしい」

ユグドラシルさん……

ひまちゃんの真意に気付くことは……なさそうだな。

まあ、幸せそうで何よりだ。

「すみません。すぐ朝ごはんを用意しますね」

「ゆつくりで大丈夫ですよ。ありがとうございます」

桜がそう言うと、フィーネさんが答え、フローネさんとウイステリアさんは頷いた。

チャッ！ チャッ！ チャッ！ チャッ！

ジュウウウ……

桜はすぐにボウルの卵を溶き混ぜて、フライパンで薄く焼き始めた。

「今のうちに……」

桜は素早くパンを薄く切り、皿の上に並べ、焼けた卵をその上に置いた。

「次は野菜」

桜はそう言いながら、畑で採れたレタスやトマトを水洗いして切つて卵の上に載せた。

さらにキャベツを千切りにして脇に置いた。

「こっちにはお肉も載せようかな」

そう言いながら、桜は薄く切ったウマドリの肉とビッグカウの肉を焼いて載せ始めた。

「最後に隠し味。元居た世界と似た調味料は多いんだけど、これだけは見つからなかったから、さつき作ったんだあ」

桜はそう言いながら、黄色や赤色の調味料をパンに塗り始めた。

「ま、まさか！」

「ふふ。食べてみてのお楽しみだよ」

僕が驚きの声をあげると、桜は嬉しそうにそう答える。

そして「皆さんのお口に合うといいんですけど……」と言いながら準備を進めた。

「ず、すごい……」

「て、手際がいいですね」

フローネさんとフィーネさんが桜の調理速度に驚き、ウイステリアさんは「絶対美味しいよ！」と言いながらお腹を鳴らした。

「よし！ できましたよー！」

桜がそう言うのと、テラスでひまちゃんが「てんちよう！ ふけました！」と再び敬礼する。

「新人さんはお仕事が早いですねえ。ぜひまた助けてくださいねえ」

桜がそう言うのとひまちゃんは嬉しそうに満面の笑みで「あい！」と返事をした。

「わあー！ すごーい！」

「ねえねはすごいでしょー！」

ウイステリアさんが驚きの声をあげると、ひまちゃんは自慢げにそう言った。

それを見て、フィーネさんとフローネさんは優しく微笑んでいる。

桜が作ったのは、ガーデンバードの卵とレタスとトマトを挟んだサラダたまごサンドと、ウマドリの肉とレタスを挟んだチキンサラダサンド。

そして、ビッグカウの肉とキャベツの千切りを挟んだトンキャベサンドだ。

「お待たせしましたあ。先に食べてくださいね」

桜は僕たちにそう言うのと、テラスから外に出て、ウマドリとホーンブルの肉塊をアイテムボックスから取り出した。

「味付けはするんだけど、丸焼きでもいいかな？」

桜が聞くと、リルとドラコは涎を垂らしながら頷く。

すると桜はいつものように結界魔法で肉を結界の中に閉じ込め、結界内に火魔法を発生させて焼く。

ほどよく焼けたところに風魔法で塩と胡椒を振りかけて、全体的に味付けをした。

最後にそれぞれを風魔法で真つ二つに切り、片方ずつ大きな木の皿に載せ、リルとドラコの前に置く。

「はいどうぞ」

桜がそう言うのと、リルとドラコはすぐに齧り付いた。

「相変わらずすごいなあ」

僕は繊細な魔力制御で結界、火、風の三種類の魔法を同時に操る桜に感心した。

しかし、桜の魔法を初めて目にしたフィーネさんたちは、戸惑いと驚きの反応を示す。

「え……今……無詠唱で……」

「え、ええ……それも三属性の魔法を同時に使ってるわね」

フローネさんとフィーネさんがそう言うのと、ウイステリアさんは「しかも、自由自在に……あんなの四魔帝でもできないよね？」と二人に聞いた。

その問いに、フィーネさんとフローネさんはゆっくりと頷く。

この流れってまずいんじゃないのかな。

「あの……四魔帝ってなんですか？」

ウイステリアさんが発した聞きなれない単語。

僕が気になり尋ねるとウイステリアさんは「え？知らないの？」と聞き返してきた。

「ウイス。レン様たちは異界から来られて間もないんですよ」

フローネさんにそう指摘され、ウイステリアさんは「あ、そうだったね」と答えた。

「簡単にご説明しますと……」

フィーネさんはそう言うつて四魔帝について教えてくれた。

レグナム国最大の都市である王都レグナムに、最高戦力として君臨する四人の魔法士——通称、四魔帝。

四人の魔法士はそれぞれ、二つの属性にそれぞれ7や8の高い適性を持ち、闇雷帝、水光帝、風氷帝、地炎帝と呼ばれているそうだ。

「その四魔帝ですら、三属性の魔法を同時に使うことはできません」

フィーネさんが説明を終えると、フローネさんは「それにこれほど繊細な魔力制御で、自由自在に魔法を操ることもできないと思います」と続けた。

「最高戦力と称されるすごい人たちのに、魔法を自由自在に操れないってどういうことですか？」僕が気になり尋ねると、フィーネさんが答える。

「魔法にはそれぞれ魔法名があり、威力や効果に差があっても唱えた魔法名が同じであれば、同一の魔法と言えます。ですがサクラ様の先ほどの魔法は、どの風魔法にも属さない魔法です」

そしてフィーネさんは具体的なたとえ話をして教えてくれた。

「例えば、肉を切った風魔法は、風の刃という魔法に属します。しかし、味付けをする際にサクラ様が発生させた優しい風は、どの風魔法にも分類できないものでした」

そしてフィーネさんは「送風とも異なりますし、しいて言うなら『風を自在に操った』という表現になるかと思います」と続けた。

威力の強弱のつけ方だけじゃなくて、どの魔法にも分類できない魔法を使ったことを自由自在と表現したのか。

でもそれって……

僕が思ったことを言葉にしかけた時、一連の話を聞いていたユグドラシルさんが「人間というのは分類し、名前を付けることで、魔法の可能性を狭めてしまっているのです」と言った。

「ですよね……もったいないなあ。僕も気を付けないと」

僕がそう言うのと、リルは「気を付ける前に、お主は大して魔法を使わんじやろう」と言い、僕が「う、うるさいなあ!」と返すと、フィーネさんたちはくすりと笑った。

つまり桜は、レグナム国最強の魔法士集団よりも魔法の扱いに長けているのか。

僕は、桜の魔法の才能を妬まれたり、懐柔しようとしてきたりすることを想像した。

「四魔帝とは関わりたくないな」

元居た世界でも往々にしてあったことだ。

桜のように才能のある人は利用されることも多い。

「教えていただきありがとうございます! さ! 食べましょう!」

僕が切り替えてそう促すと、ひまちゃんが大きな声で「おててとお! おててをあわせてえ! いただきます!」と言った。

まるで必殺技でも放つかのように元気な掛け声だ。

「んんんーっ!」

みんなで食べ始めると、ウイステリアさんは小さな口をいっぱいにして叫んだ。

恐らく『おいしー!』と言っているのだろう。

フィーネさんとフローネさんもあまりの美味しさに顔を見合わせた。

「お口に合ったようで良かったです」

いい反応に、桜も嬉しそうだ。

ひまちゃんは「はむっ! はむっ!」と美味しそうに食べている。

その光景を見てユグドラシルさんは幸せそうだった。

さっき、桜が用意して、パンに塗っていたのはマヨネーズとケチャップ。

「街になくてさあ。なんとなく作り方を知ってたから、それっぽい調味料や食材を混ぜ合わせてみたら作れたんだ」

桜は語尾に音符マークでも付きそうなほど機嫌よく言った。

「少し遅くなっちゃったね。お昼ご飯はなしにして、夜ご飯を早めにしようか」

桜の言葉に僕たちは頷き、食休みをしてから工場など施設の案内をすることにした。

「あれ? なんだか身体がすごく軽い気がする」

「ウイスもですか? 私も先ほどから体調が良いというか、力が溢れるというか」

食休みを終え、果物ボーションの製造工場へ移動していると、ウイステリアさんとフィーネさんがある変化に気が付いた。

するとフローネさんも「え、二人とも？ 実は私もです」と続いた。

「桜が作る料理を食べると、よくステータスアップの追加効果が発生するんですよ」

僕がそう説明すると、フィーネさんたちは驚いた表情で顔を見合わせた。

「つ、追加効果!？」

「そ、それって料理神^{りょうりしん}フローラ様の祝福^{しゅくふく}じゃないの!？」

フィーネさんとウイステリアさんがそう言うと、フローネさんは手で口を押さえながら「な、なんということでしょう」と言葉を漏らした。

「料理神フローラ様の祝福？ そう呼ぶんですか？」

桜が尋ねると、フィーネさんが「料理スキルを極めし者が作った料理にだけ、ごく稀^{まれ}に発生するステータス向上効果をそう呼ぶのですが……」と教えてくれる。

桜の料理スキルは、初期の段階でレベル10だったから祝福が与えられてもおかしくない。

これなら料理神フローラ様の加護を授かっていることを説明しなくても良さそうだな。

「桜の料理スキルはレベル10なんです。だからよくフローラ様の祝福が発生するんですよ」

「料理スキルがレベル10!？」

僕の言葉を聞き、フィーネさんがすぐさま驚くような声をあげた。

「あ、あたしスキルレベルが10の人間を初めてみたかも」

「私もです」

ウイステリアさんもフローネさんも、驚きを通り越し、尊敬の眼差しを桜に向けた。

「で、でも追加効果が発生する確率は100%じゃありませんし、どのステータス項目が上がるのかは食材に影響されますよ」

桜はそう言ったあと、自分なりの分析を教えてくれた。

「どうやら肉や卵などを多く使った料理だと、闘気量^{どうきりょう}や筋力^{きんりき}など接近戦に必要な項目が上がりやすい。

一方、野菜や果物などを多く使った料理だと、魔素量^{まそりょう}や魔力など魔法戦に必要な項目が上がりやすいそうだ。

「今回は農作業があるので身体を強化してくれそうな食材を多く使ってみました」

そして桜は「でもどのくらい上がるのかと持続時間は、食材の質と調理方法で変化するみたいなんです。もし農作業前に効果が切れちゃったらすみません」と続けた。

「祝福が発生するだけでもすごいことなのに……」

「そこまで分析しているなんて……」

フィーネさんとフローネさんがそう言うと、ウイステリアさんは「あたし、サクラちゃんと一生一緒にいる!」と目を輝かせた。

「内緒でお願いします。桜が人気者になって、お城に呼ばれてもしたら困りますから」

「もちろんだよ！ お城どころか世界中で大人気になっちゃう！ そしたらサクラちゃんの料理が食べられなくなっちゃうもんね！」

僕が明るい表情でお願いすると、ウイステリアさんはそう答え、フィーネさんとフローネさんは「分かりました」と口を揃えて返事をしてくれた。

「ここがポーシヨンの製造工場です。どうぞ」

食事のあと、僕は工場の扉を開け、みんなを中に案内した。

「ひ、広い……」

「こんな大規模な調合施設ちようしせつは見たことがありません」

フィーネさんとフローネさんは驚きながら言い、ウイステリアさんは「すごーい！」と工場内を舞っている。

「これがポーシヨンの製造機です。使い方は簡単で……」

僕はポーシヨンの製造工程を丁寧に説明した。

「……とまあこんな感じです。質問はありますか？」

僕は説明を終えて、フィーネさんたちを見ながら尋ねる。

あれ？ どうしたんだろ。

三人とも固まったまま動かない。

「あ、あの……」

「す、すみません！ このような優れた設備を初めて見たので、言葉を失ってしまいました！」

僕が心配して大丈夫かと聞こうとしたら、フィーネさんが慌てて答え、フローネさんとウイステリアさんも勢いよく首を縦に振った。

「謝らなくてもいいですよ。実際に作業する時に、一緒にやりながらも一度説明しますね」

僕がそう言っているとフローネさんが恐る恐る手を上げ「質問よろしいでしょうか？」と言ってきた。

「お！ 素晴らしい！ はい！ フローネさん！ なんでもどうぞ！」

質問があるということは、ちゃんと話を聞いていたということだ。

「こ、これほど優れたものを扱ったことはありません。もし壊してしまったらと思うと……」なるほど。

この製造機を扱うことへの不安があるのか。

「これはユグドラシルさんの能力で作ってあるので、非常に頑丈にできています。ですのて壊そうと思っても壊せないですよ」

僕はそう言ってから「皆さんがリルやドラコよりも強力な攻撃ができれば、別ですが」と笑い交じりに続けた。

「じゃあ絶対大丈夫だね！ 早くポーシヨンを作ってみたい！」

ウイステリアさんは言葉遣いが明るくて元気だから接していて気持ちがいいな。

ウイステリアさんに、僕は「慌てずに。あとで一緒にやりましょうね」と伝えた。

「これほど優れたものを考案できるだなんて」

「ええ。ユグドラシル様は本当に人知を超えた存在なのです」

フィーネさんもフローネさんも、壊してしまう不安がなくなり、安心した表情でそう言った。

「僕の頭の中を読み取って、ユグドラシルさんが作ってくれたんですよ。すごいですよね」

僕がそう言うと、フィーネさんとフローネさんは再び固まってしまった。

あれ？ どうしたんだろう？

三人の様子を見ると、ウイステリアさんとフィーネさんが言う。

「こ、これ！ レンくんが考えたの!? なになに!? レンくんって天才なの!?」

「どれほど高度な環境で学べば、これほどのものを思いつくのかしら」

そしてフローネさんが「雇い主がこれほど聡明なお方だなんて……私たちは幸せです」と続いた。

この流れはよくないな。

同じ立場の仲間として一緒に働きたいのに、崇められると接しにくくなる。

「あ、いえ。たまたま元いた世界での知識が役立っただけです。大したことじゃないですよ」

事実、僕の知力が高くないしね。

三人の尊敬の念が強まりすぎる前に、僕は話を進める。

「安全第一。失敗してもいいですし、間違ってもいいです。作業が遅くてもいいです。でも無理と怪我だけはしないでください」

僕はそう言うてから、雰囲気を変えるために「ポーション飲み放題に加えて、果物食べ放題なので、疲れた時はきちんと休憩してくださいね」と笑いを誘った。

「では次へ。こっちが共同の研究室です」

次に僕は、三人を製造場の隣にある部屋へ案内した。

「ポーション製造が終わって余った時間は、ここで好きに研究をしてください」

僕がそう言うてウイステリアさんが「あんなに大きな自室とは別に、こんなにおっきな研究室もあるの!？」と驚く声をあげた。

そういえば、三人の部屋は僕たちと同じ作りにしたから、あの部屋は小さなウイステリアさんくらすると特大サイズだな。

後で使い勝手を聞いて、使いにくいようなら改良してあげよう。

「はい。基本的小部屋での仕事は禁止です。個人的な研究を止めはしませんが、部屋ではしっかり休んでください」

「にいに。おひるねはできないの?」

すると僕の言葉を聞いたひまちゃんが、不安そうな表情で尋ねてきた。

その子供らしい質問に、僕たちもフィーネさんたちも驚くと同時に和んでしまった。

「ふふ。ひまちゃん。大きくなるとお昼寝はしなくなるんだよ。お姉ちゃんも学校で寝たことないよ」

ひまちゃんの言葉を聞いて、桜は笑顔で教える。

桜に教わり、ひまちゃんは「え？　なんで？　おひるね、きもちいいよ？」と不思議そうに聞き返し、さらに場が和んだ。

「そうだね。お昼寝は大事だね。でもここにベッドを作ると、フィーネさんたちがここで泊まりして、お部屋に戻らない気がするから、お昼寝はお部屋でもらうね」

僕がそう言うと、ひまちゃんは「それならあんしんだね」と満足そうに答えた。

フィーネさんたちを思っただけの質問だったのか。

ひまちゃんは優しい子に育ってるなあ。

それに桜も、すごく配慮ができる頭のいい子になったなあ。

『大人になるとお昼寝はしない』と言えば、きっとひまちゃんはフィーネさんたちの容姿を見て『ふーねちゃんたちはこどもだよ？』と聞き返しただろう。

もしフィーネさんたちが幼く見える容姿を気にしていたら、傷つくことになっていたかもしれない。

誰も傷つかない言い回しが自然にできるようになっていることに、僕は感心した。

「では、お預かりしていた実験道具などを設置するので、どこに置けばいいか教えてください」

僕が妹たちの成長を感慨深く思っていると、桜はそう言ってフィーネさんたちをここに連れてくる時に代わりに運んできた研究道具や書籍などをアイテムボックスから取り出して並べ始めた。

「おお！　本格的ですね！」

僕はそれらを初めて見たので、この世界の研究器具の出来の良さに驚いた。

「街で見たポーションの瓶や教会のステンドグラスも綺麗だったけど、研究器具までこのレベルとは……職人の技術の高さがうかがえるな」

フラスコや試験管。

それと、名前は知らないけど、ガラスのグルグルしたやつ。

昔に理科室で見たことがあるような気がするな。

「サクラ様。ありがとうございます」

「私たちが運んだら壊れていました」

フィーネさんとフローネさんは、桜に丁寧にお礼を言った。

「私にできることならなんでもお手伝いするので言ってくださいね」

桜は、自分が役に立っていることが嬉しいのか、明るく微笑む。

「ういすちゃん。これなあに？」

研究台によじ登るようにして研究器具に顔を近づけ、ひまちゃんは近くにいたウイステリアさんに尋ねた。

するとウイステリアさんは、「これはねえ……」と楽しそうに説明を始める。

その光景を見た瞬間、ひまちゃんが研究器具を倒し、壊してしまおうと直感が働く。

「ちょ、ちょっと待ってねえ！ ぜったいに壊しちゃだめだから、抱っこさせてねえ！」

僕はそう言っただけでひまちゃんを抱き上げ、一緒にウイステリアさんの説明を聞くことにした。

ひよつとして僕の直感スキルは、今までの育児経験から培われたものかもしれないな。

「……って感じで使うんだよね！」

ウイステリアさんが気持ちよく説明を終えると、ひまちゃんが「すごい！」と言いながら拍手をした。

ウイステリアさんが「へへへ。それほどでも」と嬉しそうに答えるので、桜が僕を見て言う。

「丸底フラスコにソックスレー抽出器。私たちの世界のと形も使い方も同じだね」

僕はウイステリアさんの説明を理解できなかったし、桜の言う機器名も分からなかったけど、とりあえず「そ、そうだねえ」と答え、収穫作業を教えるために畑に移動した。

「ではでは、始めますねえ」

桜は楽しそうにそう言うのと、リンゴの木に魔素を流し込んだ。

「み、実がどんどん育っていく！」

「すごーい！」

フィーネさんとウイステリアさんは声をあげ、フローネさんは「こんなの見たことがありません」と驚いている。

「普通は魔素を流し込むと植物がだめになっちゃうと思うんですけど、ここにあるのは全部ユグドラシルさん特製のもので大丈夫なんですよ」

そして桜は「とは言っても魔力の制御が少し難しいんですけどねえ」と笑って続けた。

「ついでにこっちも……」

桜はそう言うのと、他のリンゴの木やミカンの木にも魔素を流し込んで実を育てた。

「あのんでもない効果のポーションの原料は、こんな風に作られてたんだね！」

ウイステリアさんが目を輝かせて言うのと、桜は「実を育てるのは任せてください！」と嬉しそうに答えた。

「それで、皆さんに手伝っていただきたいのはここからです」

僕はそう言っただけで布袋をあげ、リンゴをもぎ取って収穫作業の手本を見せた。

「僕たちがいる時はアイテムボックスに収納できるんですけど、いない時は手で収穫することになると思います」

僕が説明をしていると、ひまちゃんが駆け寄ってきた。

「ひいちゃんも！ ひいちゃんも！」

ひまちゃんはそう言いながら、リンゴを採るためにぴよことジャンプした。

でも、全然届いてない。

「ではヒマちゃん様はここからどうぞ」

ユグドラシルさんはそう言うのと、手すりの付いた脚立きやうたつを作り出した。

いつもなら抱きかかえるのに、珍しいな。

不思議に思い尋ねると「これならヒマちゃん様だけの力で収穫できますから」とユグドラシルさんは答えた。

ひまちゃんの成長の為に、自分で脚立を動かして収穫をするという経験をさせようという考えのようだ。

ただの過保護ではなく、まるで母親のような接し方に感服した。

「うーんしょ！ とれた！ こうやるんだよー！」

ひまちゃんは少し先輩になった気分なのだろう。収穫したリンゴをフィーネさんたちに見せた。

ひまちゃんの愛嬌あいきやうが炸裂さくれつしているのか、信仰する精霊できあひが溺愛できあひしている子だからか、フィーネさんたちは、まるで尊いものを見る表情で拍手を送った。

するとひまちゃんは、明るさと一生懸命さが混じったような表情で「いにい！ ふくろちようだいい！」と言いながら僕を見る。

ちよつとした作業の手伝いでも、ひまちゃんにとってはお仕事なのだろう。

僕が袋を持って傍に行くと、ひまちゃんは脚立の上からリンゴを袋に入れ、満足そうな表情を浮

かべた。

「では皆さんも一緒に。ただし、収穫作業をする中で、二つ注意点があります。一つは怪我をしないこと。そしてもう一つは、皆さんだけで作業をする時に問題となる点を見つけることです」

そして僕は、「もし僕たちが王都に呼ばれた場合、その間は皆さんだけで収穫と製造をしてもらうことになるからです」と続けた。

「承知しました」

「はいー！」

僕の言葉にフィーネさんとフローネさんは口を揃え、ウイステリアさんは舞いながら答えた。明るさと前向きさを兼ね備えた、気持ちのいい返事だな。

「では僕たちはこつちを、フィーネさんたちはそちらをお願いします」

僕は傍にあるリンゴの木を指さして言い、収穫用の布袋をフィーネさんたちに渡す。

すると三人は「まずはやってみましょう」と、収穫作業を始めた。

「うんしょ。やつぱりヒマワリ様と同じで、高さが課題ね」

「ええ。脚立や作業台を用意しないと上の方は届かないわね」

早速、フィーネさんとフローネさんが課題と対策を話し始めたな。

ウイステリアさんはどうかな。

「うーんしょっ！ ふーんしょっ！」

彼女を見ると、自身の胴体ほど大きなリングを一生懸命に引っ張っていた。

「ふう。なんとか採れたあ。料理神フローラ様の祝福があつてやつとだあ」

そしてウイステリアさんは「筋力強化魔法か身体能力強化魔法が必須かも」と続けた。

「あ、皆さん……」

「桜、ちよつと待ってね」

困っているフィーネさんたちの様子に気付き、桜が助け舟を出そうとしたが、僕はそれを止めた。

「蓮兄？　なんで止めるの？」

「すぐに分かるよ。見てて」

僕がそう答えると、桜は助けたそうな表情をしながらフィーネさんたちの行動を見守る。

「魔法でやってみよう。威力を抑えて……風の刃！　よし！　採れた！」

様子を見てみると、ウイステリアさんはリングの実の果柄を、小さな風の刃で切りつけて収穫した。

「お、重い……」

そして収穫したリングを落とさないように、しがみ付きながら羽ばたき、ゆっくりと降りてきた。

「ウイス。大丈夫ですか？」

「う、うん。なんとか。へへへ」

フィーネさんが心配すると、ウイステリアさんは収穫できたことを喜ぶように笑顔で答えた。

「ウイステリア。無理をはいけませんよ。戦闘の女神をその身に宿せ。身体能力強化魔法」

「ありがと！　力が漲ってきたよ！」

フローネさんが支援魔法をかけると、ウイステリアさんが立ち上がって意気込んだ。

魔法名の前に何か言ったけど、あれが以前グランさんが話していた魔法の効果を高めるために唱えるっていう導き言葉つてやつかな？

あとで聞いてみよう。

「高いところはウイス、低いところは私たちという風に役割分担するのが良いかもしれませんね」

「あ！　それ！　あたしも今言おうと思ったんだ！」

フィーネさんとウイステリアさんがそう言うのと、フローネさんは「果実は高いところに多くあります。なのでそれですとウイステリアの負担が多くなってしまうですね」と悩みつつ言った。

「様子を見て良かったでしょ？」

「ほ、ほんとだ。蓮兄はなんで三人が自分たちで問題を解決できると分かったの？」

僕が聞くと、桜は不思議そうに尋ねてくる。

「なんとなくな。前向きな取り組み方を見てたら、フィーネさんたちなら問題の発見と改善の提案ができると思ったんだ」

僕がそう答えると、桜は感心したように「へえ。蓮兄はよく見てるんだね」と言った。

「ほんの少しだけ社会人としての経験があるからね。あれを買ってほしいとか、これをこうしてほ



しいとかを言いやすくしてあげようね」

僕がそう言うと、桜は嬉しそうに「うん！」と答え、少しの間フィーネさんたちの様子を窺いながら収穫作業をした。

「あ、話し終わったみたいだよ」

「ほんとだ。皆さん！ 少しお話ししませんかー？」

三人の様子に気付き、桜はさっそくフィーネさんたちに声をかける。

そして桜はアイテムボックスからシートを取り出し、地面に敷いた。

「果物でも食べながら話を聞かせてください」

桜はそう言って、木の皿にミカンやリンゴを並べた。

「ありがとうございます」

「わーい！」

桜の言葉に、姉妹のハモリ声とウイステリアさんの明るい声が返ってきた。

「あむ、もぐもぐ……うまうま」

白いレジャーシートに座って、少し休憩。

ひまちゃんはユグドラシルさんに剥いてもらったみかんを美味しそうに食べている。

「フローネさん。さっきウイステリアさんに支援魔法をかける時に言った『戦闘の女神をその身に

宿せ』って言葉は、導き言葉なんですか？」

僕がみかんを食べながら尋ねると、フローネさんは「はい。魔法の効果を高くしたり、持続時間を長くしたりする場合は正式詠唱を使用するんです」と答えた。

「正式詠唱？」

「はい。サクラ様のは無詠唱。魔法名だけを唱えるのが略式詠唱。導き言葉の後に魔法名を唱えるのは正式詠唱と呼ばれています」

僕が聞き返すと、フローネさんは丁寧に教えてくれた。

そしてフィーネさんとウイステリアさんが続く。

「戦闘中や急いでいる時、少しの効果で充分な時は略式詠唱が一般的です」

「うんうん。さっきは急いでなかったし、そのあと農作業をするから、効果時間を長くするために正式詠唱で身体能力強化魔法をかけてくれたんだよ」

なるほど。そういう風に使い分けをしているんだな。

そしてやはり戦闘中に魔法名を叫ぶのか……

この世界感覚に慣れていききたいけど、恥ずかしいから僕は無詠唱を貫こう。
そんなことを考えていると、桜が切り出した。

「み、皆さん。収穫作業はどうでしたか？」

三人は顔を見合わせ、フィーネさんが代表して口を開く。

「今見つかった課題は果実の位置の高さと、それに伴う作業効率の低下です」

フィーネさんは簡潔に話すから分かりやすいな。

「課題の解決方法は見つかりましたか？ なんでも協力するので言ってくださいね」

「はい。ちょうど今話し合っていたのですが、それぞれの木のそばに、先ほどヒマワリ様が使われていたような台をご用意いただけませんか？」

桜の言葉に、フィーネさんは端的に答えた。

「それくらいであればお安い御用です。ユグドラシルさんに……」

「ゆぐちゃん。いちごさんとか、おはなみたいに、ちいさくできないのかな？」

桜がユグドラシルさんに脚立の作成を依頼しようとした時、ひまちゃんが思いついたかのようにユグドラシルさんに尋ねた。

イチゴ？ お花？ なんのことだろう？

「小さく？ ヒマちゃん様。少し失礼しますね」

僕がひまちゃんの発言の意図を考えていると、ユグドラシルさんはそう言って長く綺麗な新緑の葉でできた髪を耳にかけながら、ひまちゃんと額を合わせた。

「なるほど。そういうことですか。可能ですよ」

ユグドラシルさんはひまちゃんの考えを読み取ると、リンゴとミカンの木に手をかざした。

すると果実の大きさはそのままに、みるみるリンゴとミカンの木がそれぞれ低くなり、横長の四

角い形に変化していく。

「す、すごい……」

「木が動いてるよ」

フィーネさんとフローネさんが声を揃え、ウイステリアさんも驚いていた。

「あっ！」

僕と桜も同時に声をあげ、思わず顔を見合わせた。

「イチゴって前に一緒に行ったイチゴ狩りのことか！」

「そうみたい！ お花は、家の近くにあったツツジの垣根のことかも！」

するとユグドラシルさんは「これで切って収穫するようです」と言いながら、木製のはさみを作り出し、みんなに手渡した。

「はじめからこうすればよかったんだ。なんで気付かなかったんだろう」

「僕たちは固定観念に囚われていたんだね。僕もまったく思いつかなかったよ」

桜の言葉を聞いて、僕はそう答えた。

リンゴの木とミカンの木は、桜の記憶をもとに生み出され、育てられた。

だから元の世界にあったリンゴの木やミカンの木だけど、別に木にする必要はなかったんだ。

ひまちゃんの柔軟な思考には本当に驚かされるな。

「これで、みんなでいっしょにできるね！」

ひまちゃんはそう言っただけでフィーネさんたちを見た。

垣根風に改良されたリンゴとミカンの木の高さはひまちゃんの顔の高さ程度。

これならフィーネさんとフローネさんにとって、ちょうどいい高さだ。

最も低いところであれば、ウイステリアさんが飛ばなくても届くし、申し分ない。

「まあヒマワリ様……」

「私たちのことを考えてくださったのですね……」

フィーネさんとフローネさんが、今にも拝みそうなそぶりですう言っていると、ウイステリアさんは「すごいね！ ヒマワリちゃんは天才だよお！」と舞いながら言った。

確かにその通りだ。

「ひまちゃんありがとう。また思いついたことがあったら教えてね」

僕がそう言うと、ひまちゃんは「あい！」と敬礼して答え、慌ててミカンを口に入れ始めた。

「んんん！ んんんー！」

お口いっぱい言葉にはできていないけど、きつと「いにい！ いくよー！」と言ってるんだろ
うな。

やる気満々で手招きしている。

「ひまちゃん、慌てなくても大丈夫だよお」

桜の声も聞こえないのか、ひまちゃんは垣根に向かって走って行く。

「あたしたちも行こー！ 問題なく収穫できるか試してみたいし！」

ウィステリアさんがそう言うのと、フィーネさんとフローネさんは声を揃えて返事をした。ひまちゃんのアイディアは大成功。

僕たちは低くなった木と、切れ味のいい木製のハサミのおかげで難無く収穫作業をすることができた。

「袋がいっぱいになったら、こっちのシートの上に置いてください」

僕は収穫作業が進み、布袋が一杯になってきているフィーネさんたちにそう指示する。

その後、手分けして果物の入った布袋を製造工場へ運び、ポーション製造を一緒に行うことに。

「あとは、ここを戻して……よし！」

「こっちも栓したよー！」

フィーネさんがタンクのバルブを閉め、ウィステリアさんが樽たるの栓を詰めて言った。

その様子を見てフローネさんは「先に搾り終わった布袋の掻き出し作業を始めておきますね」と声をかけた。

「皆さんすごいですね。一回で覚えちゃうだなんて」

フィーネさんたちは覚えが早く、先ほどの説明だけでポーションの製造方法を完璧に理解していた。

そのため、一緒に作業はしたけど、再説明をすることはなく、リングポーションが完成した。

「今回は納品まで少し日があるので、完成したポーションは傷まないように僕のアイテムボックスに入れておきますね」

僕はそう言うて樽を収納して、掻き出し作業を始めようとする三人に「それを片づけたら今日の仕事は終わりです」と伝えた。

「これで終わりなの!？」

ウィステリアさんが声をあげ、フィーネさんとフローネさんは、同時に部屋の小窓を見て「え？ ええ？」と口を揃えて驚いている。

二人が見ている小窓から差し込む光にはまだ茜色あかねいろは含まれていない。

おそらくまだ外が明るいのに仕事が終わったことに驚いているのだろう。

「まあ初日ですしいいじゃないですか。早めに終わってゆつくりしましょう」

僕がそう言うのと、桜も「そうですね。ミカンは明日にしましょう。休息も大事ですから」と続いた。

それでもまだ、フィーネさんたちは業務量の少なさに戸惑っている。

「ささ、片づけてご飯にしましょう！」

「今日は歓迎バーベキューですからいっぱい食べてくださいね！」

僕と桜が明るく言うのと、ひまちゃんが「わーい！ ばーべきゅうっ！ ばーべきゅうっ！」と歌

いながら謎の踊りを始めた。

「ばーベきゅー？」

フィーネさんとフローネさんが口を揃え、同時に首を傾げているが、ウイステリアさんは「初めて聞いたけど、サクラちゃんを作るならきつと美味しいよ！」と目を輝かせている。

「美味しいんですよ。楽しみにしてください」

僕がそう言うと、三人は顔を見合わせた。

「ではお言葉に甘えさせていただきます」

三人を代表してフィーネさんがそう言い、僕たちは片づけ作業を進めた。

「掻き出した袋はどうすればよろしいでしょうか？」

「いつもならこの生ごみは埋めて肥料にするんですが、今回は私がもらっておきますね」

フローネさんに聞かれ、桜はそう答えてからリンゴ袋の中身だけをアイテムボックスに収納した。

「何に使うの？」

「乾燥させてアップルティーに使ったり、粉末にしてパンに練り込めれば美味しいんじゃないかなって」

僕が聞くと桜は明るく楽しそうに答えた。

「それはいいね。皆さんも使いたいものがあれば、どんどん言ってください」

廃棄物の再利用はどんどん推進していこう。

僕がそう思っただけでそう伝えると、フィーネさんたちから研究に使いたいとの声が上がった。

「この状態で渡すのは気が引けるので、乾燥させてからお渡ししますね。生の状態がよければ、畑から好きなだけ取ってください」

「サクラ様、ありがとうございます。ちなみに、本来はどのように廃棄するのですか？」

フローネさんはお礼を言ってから尋ねる。

「あ、さっき言った通りで埋めて肥料に……そうか。運び方が難しいか」

このまま抱き上げて運ぶと服が汚れるし、床まで果汁が滴るだろう。

気が付けば僕らはアイテムボックスありきで生活するようになってたな。

「掻き出したものをどうやって運ぶか……よし。運びやすいように大容量のマジックバッグを用意しようか」

「あ、それいいね！」

僕と桜の意見が一致した瞬間。

「マジックバッグをですか!？」

フィーネさんとフローネさんが口を揃え、ウイステリアさんは「い、いいの!？」と驚いている。

「もちろんです。仕事で使うものですから、こちらで用意します」

僕がそう言うと三人は驚き、そして感謝した。

「あとは服の汚れですね……」

「あ、あの……タンク内だけではなく工場全域に浄化クリーニングをかけるのは、いかがでしょうか？」

僕が考えていると、フローネさんが恐る恐る提案してくれた。

「確かに。脱衣所みたいに空間ごと綺麗になれば便利ね」

「うん。最高かも」

フローネさんの言葉にフィーネさんとウイステリアさんも続いた。

意見の一致を見計らって僕がユグドラシルさんを見ると、ユグドラシルさんはゆっくりと頷き、魔素を練る。

そして、掻き出し作業後にタンク内を綺麗にするためにドア付近に用意していた取っ手に触れた。

「効果範囲を拡大しました。これで問題ないかと」

「ありがとうございます。試しに使ってみてください」

僕はユグドラシルさんにお礼を言い、フローネさんを促した。

「は、はい」

フローネさんが緊張した様子で、新しくなった取っ手に魔素を流し込むと、工場内に光が広がった。

「ぴかぴか！ きもちいいね！」

浄化クリーニングを工場全域にかけたため、汗ばんでいた身体もすっきりさっぱりだ。

今は服や床に果汁汚れがついていなかったから、工場内の見た目は変わらないけど成功みたい

だな。

「ユグドラシルさん。完璧です。ありがとうございます」

僕が改めて言うと、フィーネさんたちは跪ひざまずいて感謝を口にくれた。

「果物を入れていた袋を洗う手間も省けましたし、より楽になりましたね。じゃあ今日は終わりにしましょう」

僕がそう言うときフィーネさんたちは、給料に見合った働きができているのだろうかと不安なようだった。

「慣れてきたら早めに仕事を終わらせて、好きなだけ品種改良や新商品の研究をしてください」

フィーネさんたちが気負わないように僕がそう言うと、三人は目を輝かせながら頷いた。

「あれ？ ドラコ。リルは？」

作業を終え、工場を出て湖のそばまで来ると、そこにはリルの姿がない。

僕は気になって、伏せて休んでいるドラコに声をかけた。

「少し前に肉を取りに行ったわよ。すぐに戻るって言ってたから、そろそろ戻るんじゃないかしら」

「そっか。じゃあ少し休憩して待とうか」

僕がドラコにそう言うと、ひまちゃんは「どちらこ！ あそぼー！」と言って、ドラコの体をよじ

登り始める。

「ふいーねちゃんたちも、おいでー!」

ひまちゃんはドラコの背に立ち、元氣に呼んだ。

すっかりお友達ができた気分なんだろうな。

「い、いえ! 私たちは登れません!」

フィーネさんがそう言うのと、その横でフローネさんも勢いよく首を縦に振る。

流石にまだドラコの背で遊ぶことはできないか。

「え……すべりたいみたいでたのしいのに……」

断られたひまちゃんはすぐ残念そうな表情をした。

きつとドラコの背と尾を滑って一緒に遊ぶつもりだったんだろう。

「気にしないでいいわよ」

僕がフィーネさんたちに伝えようとしたことを、ドラコが口にした。

「私も一緒に遊ぼうかな」

桜はそう言って裸足になってドラコの背に登る。

フィーネさんたちが遊びやすいようにと率先してやってくれたのだろう。

「ねえドラコ。尻尾をあつちに向けられる?」

「ん? ええ」

桜の指示通りにドラコが湖に尾を向けると、桜はひまちゃんを前に抱えながら、湖に向けてドラコの尾を滑った。

バシヤッ!

以前のように思い切り飛び込むのではなく、浅瀬に滑り下りる程度。

「あれなら安全だし、あんまり濡れないので、嫌じゃなければどうぞ」

僕がそう言うときフィーネさんたちは、ゆっくりと頷いてドラコに近づいた。

その様子を見たひまちゃんは、元氣に「いっしょにしょー!」と言いながら、走りながら湖から出てきてフィーネさんたちに駆け寄った。

ひまちゃんが人見知りをすることもなく、性格が歪むこともなく、明るく元氣に成長している姿を見ると安心するな。

「待たせたな」

ひまちゃんたちが遊んでいる姿を見て、ほほえましく思っていると、リルが戻ってきた。

そしてリルは「今回も大量じゃ。急いでゆくぞ」と続けた。

「桜あ! ちょっと肉を取りに行ってくる! 今回はすぐに戻るからねえ!」

僕はマンティコアを倒した時のように遅くならないことを伝えた。

「はーい! 氣を付けてね!」

「にいに! いってらっしゃーい!」

立ち読みサンプル はここまで

桜とひまちゃんがドラコの背から手を振り、その傍ではフィーネさんたちがお辞儀をして見送ってくれた。

「ゆくぞ」

そして僕はリルと東の森に向かう。

「だいぶ先なの？」

森の上空を、風魔法で作りの板から板に飛び移りながら僕は尋ねた。

前にグリフォンを倒した森を越え、平原に出るとリルは「あれじゃ」と言いつて視線を先に向けた。

「あれって……川しか……いや、その先か」

リルの言う方向には大きな川が流れており、そのさらに先には倒した魔物が山のようになっているとされる盛り上がりがあった。

「ん？　なんか群がってない？」

山積みされた魔物は、マンティコアの時と同じように結界魔法で守られているのだろう。

その魔物を狙って熊型の魔物や狼型の魔物が十数匹群がっている。

「すごい。まさに歯が立たないってやつだな」

群がる魔物を鑑定して見えたステータスは、どれも僕が倒したグリフォンと同じくらいの強さだ。それなのにどの魔物の牙も爪も、火や雷の攻撃魔法も、全て青白く光るリルの結界魔法で阻まれている。

「雑魚どもが我が飯に群がるでないわ！」

すると僕が武器を取り出す間もなく、リルが怒号と同時に竜巻を発生させて魔物の群れを上空へと吹き飛ばし、さらに、上空でもがく魔物の首を、風の刃で切り落とした。

「なにをばさとしておる。さつさと収納せんか」

僕が驚いていると、リルは冷静に言った。

「あ、ああ。それにしてもすごいな」

リルの攻撃魔法にも驚いたが、さらに驚いたのは、結界魔法で守られていた魔物の死体が吹き飛んでいないことだ。

それどころか結界に守られていない地面は、竜巻の影響で草や地面が抉れているのに、結界内は完全に無傷だ。

僕が驚いていると、リルは自慢げに「肉を守るために加減をしたからな」と言った。

そしてリルは結界を解き、涎を垂らして尾をブンブンと振りながら「こいつらは美味いのだ

ぞお」と続けた。

さっきまでカッコよかったのに、台無しだ。

まあリルらしいと言えばそうんだけど。

山積みになっている魔物はホーンブル、トントン、ラージエルク、マーブルドラージホーンブル。牛や豚、鹿に似た魔物ばかりだな。